

Program Note

ボフスラフ・マルティナー：フルート、チェロとピアノの為のトリオ

この曲が作曲された1944年は終戦間近、マルティナーの人生の中でも穏やかな時だったようです。3楽章とも調号のつかない譜面で書かれていますが、調性はたいへん移り気です（第2楽章は変ロ長調、第3楽章はト長調の主和音で終始します）。しかしフレーズの一つ一つはわかりやすく、耳に心地よい楽しい曲になっています。

第1楽章（4/4 Poco Allegretto）：元気のよいへ長調のピアノのスタッカートで始まり、4小節間のあつという間にハ長調の強烈なスケールを打ち出し、27小節目でニ長調で終始するという第一主題を持つ変形ソナタ形式。

第2楽章（6/4 Adagio）：ピアノの神秘的なフレーズで始まり、その雰囲気を保ったままフルートそしてチェロが加わりメランコリックな世界を作っています。

第3楽章（2/4 Andante: Allegretto scherzando）：フルートのカデンツアで始まるこの楽章はすぐに元気のよい踊りたくなるような音楽になります。途中、中世を思わせるような中間部を経て、再び冒頭のテーマが戻ってきます。（S）

ボフスラフ・マルティナー：バレエ音楽『調理場のレヴュー』演奏会用組曲

チコからパリへ移り住んでいたマルティナーは、1927年に1幕のジャズバレエ『調理場のレヴュー』をジャズバレエ3部作の3曲目として作曲しています。ヤルミラ・クレシュロヴァーの台本に基づいたこのバレエは同年11月に「気高い鍋の誘惑」というタイトルで彼女の舞踏団によりブランハで上演され、大成功を収めています。バレエの筋は、鍋と鍋蓋が結婚することになるが、皿拭き布と共に誘惑を企てる泡立て器によって邪魔される。ほうきが皿拭き布を抑えようとするが、鍋蓋は遠くへ転がっていってしまう。そこへ巨大な足が出てきて鍋蓋を蹴り戻して鍋蓋は鍋と再会、長い苦難もこれでハッピーエンド…という、文字通り調理場を舞台とした台所道具達による喜劇です。演奏会用組曲は1930年1月にパリで初演され、この成功によってマルティナーの名声はさらに知れ渡ることとなりました。

曲はヨーロッパやアメリカで流行していたジャズ等大衆音楽の要素を取り入れているほか、当時彼が傾倒していたストラヴィンスキーや、故郷チコの民族音楽の影響が見受けられます。編成はCl.Bsn.Tp.Vn.Vc.Pfという特殊な組み合わせの六重奏ですが、この組み合わせによって当時のパリの典型的なジャズバンドに似通った音を作り出すことに成功しています。第1曲『プロローグ』：短いファンファーレとそれに続く威勢は良いがリズムの歪んだマーチを、全楽器が交代で受け継ぎ、展開していきます。

第2曲『タンゴ』：当時タンゴはアルゼンチンからヨーロッパに伝わり流行していました。この曲ではタンゴというよりハバネラとでも言いたくなるような、憂いを含んだ皮肉っぽいスペイン風の旋律が楽器を変えて登場します。チェロの最低音で終止し、そのまま次の曲に続きます。

第3曲『チャールストン』：タンゴから受け継ぐ導入部と、主部（チャールストン）から成ります。チャールストンとは1920年代後半にアメリカを中心に大流行したダンス音楽で、fox trot（きつねの早歩き）と呼ばれる形式の一種です。禁酒法下の退廃的なムードの中で出現したこの音楽は、両膝をつけて、両足を交互に斜め後ろに跳ね上げるという強烈な踊りや、コルセットを着けずスカート丈を短くするなど女性の服の変化と相まって大流行し、その流行の凄さはのちにこの時代を「チャールストン時代」と呼んだことにも表れています。

第4曲『フィナーレ』：プロローグの回想で始まりますが、すぐに喜びの雰囲気を表す音楽が続きます。ジェームズ・P・ジョンソンのチャールストンの他、当時アメリカで流行していたダンス音楽の断片が引用されています。（C）

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ・ポルカ集

ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでお馴染みのヨハン・シュトラウス（2世）は同姓同名の父が確立したウィンナ・ワルツをさらに洗練させ、世に広め、芸術の域にまで高めた人です。父が「ワルツの父」と呼ばれるのに対し、息子が「ワルツ王」と呼ばれる所以です。

ワルツはそれまでの踊りと違い、男女の身体接触が非常に多いから爆発的に広まったのだ、とする説がありますが、それは間違ではないにしろ、やはりこの「ワルツ王」の功績があつたことも付け加えなければ完全ではないでしょう。

本日は彼の作品から、特に知名度が高く、また面白い作品を選び抜いて演奏致します。

なお、後半は私達にとって初めての試みとなる「お詫び演奏会」です。各曲目の説明はお話の中でさせて頂きます。（C）

（執筆 S=白崎、C=佐々木）

今回の演奏会はクラシックにあまり詳しくない方でも知っているヨハン・シュトラウス2世の曲の中でもさらに有名な楽しいワルツ・ポルカ集を後半に、そしてクラシック曲にもあまり知られていませんがこれまた楽しいマルティナーの曲を前半にプログラムしてみました。マルティナーの曲はオリジナルの編成で、シュトラウスの曲は当団の編曲による室内楽版で演奏します。

マルティナーってどんな人？

生涯に約400もの作品を残した多作のマルティナーですが、そのスタイルは時代や活動の場などの影響を強く受け、変化が激しかったともいえます。

1890年にチェコロバキアのポリチカに生まれたボフスラフ・マルティナーは早くから音楽的才能を發揮し、小さいときからヴァイオリンを弾き、室内楽を楽しんでいたようです。17歳の時、地元では基金を集めてこの若く有能な音楽家を大都会プラハへ送り出そうということになり、マルティナーは見事音楽院へ入学します（バイオリン科）、学校に無断で素人楽団で演奏したり古本屋めぐりに精をだし過ぎたりで、2年連続で落第してしまいます。その後、作曲のクラスがあつたオルガン科に再入学するものの、またまた落第し、「矯正不能の怠け者」として退学させられてしまいます。

それでも両親の理解のおかげで、再びプラハへ戻ることを許されたマルティナーは作曲の道へ進むことを決心します。20歳になる前にすでに25作品以上の曲を作曲していますが、このころのプラハには作品にチコの「アイデンティティー」表現することに執心していた他の作曲家が多かったのに対し、マルティナーが傾倒していたのはドビュッシーでした。

1914年、第一次世界大戦が勃発してチコ・フィルのヴァイオリンに欠員が発生したため、マルティナーは臨時団員として参加することになり、ここで身をもってオーケストラについて勉強することができます。1919年に演奏旅行で短期間パリを訪れる機会を得たマルティナーは、再びパリへ戻ることを決意したようです。同年、愛国的なカンタータ「チコ狂詩曲」がチコ・フィルで初演され、スマタナ賞を受賞するまでの作曲家になっています。

この頃には作品もだいぶ増えてきたマルティナーですが、再びプラハの音楽院へ作曲の勉強のために入学します。しかし、またしても落第してしまいます。1923年、父の死によって勉学の継続が困難になったマルティナーは、決意通りパリへ渡ります。最初は短期滞在する予定でしたが、奨学金を得ることに成功し、以降17年間をパリで過ごすことになります。

すでにパリではドビュッシーなどの印象派は「古い」音楽とされていることに戸惑いを覚えながらもマルティナーは、当時流行していたジャズやストラヴィンスキーの影響を色濃く受けます。作曲家ルーセルに対する尊敬の念が強まっていたマルティナーは生来の内気な性格を克服して、パリへ来て早々、弟子入り志願をします。ルーセルはこの申し込みを受け入れ、愛弟子として非常に可愛がったようです。

徐々にマルティナーの名前は作曲界にも聞こえるようになってきていましたが、この頃に劇場用の実験的な作品を創作し始めます。その成功第一弾がジャズの語法を取り入れたバレエ『調理場のレヴュー』（1927）です。1931年献身的なフランス人女性と結婚したマルティナーはこの時期、室内楽を多く生み出しています。しかしやがてナチスの台頭でチコには戻れない状況になっただけではなく、パリにおいても身の危険が差し迫った

1941年、夫人とともに命からがらアメリカへ渡ります。

アメリカではニューヨークの生活スタイルにとても馴染めないマルティナーでしたが、実験的な作品は試みずに自分の音楽を追及していきます。マルティナー最高の理解者・指揮者のクーセヴィツキーの依頼により交響曲第1番を作曲し（1942）、その後一年ごとに第5番までの交響曲をいきに生み出しました。「フルート、チェロとピアノの為のトリオ」が作曲されたのもこの頃です（1944）。

終戦を迎えてからは、1959年に胃癌のためその生涯を閉じるまで、教職の仕事のためヨーロッパとアメリカを行き来しました。終戦直後にはマルティナーに何度も落第を突きつけたプラハ音楽院からも作曲科マスタークラスの教授職の打診があったようです。

様々なスタイルの作品を生み出したマルティナーですが、根底に流れるマルティナーらしさは「チコの音楽、ドビュッシーの音楽、そしてイギリスのマドリガルによって最も影響を受けた。」という彼の言葉が説明しています。（S）